令和５年６月 17 日
北関東フォーラム
於：シムックス

# 中斎塾　北関東フォーラム
# 令和５年度 第６回

おはようございます。ただ今、開会挨拶で塚越参事が「今、この時間は真剣勝負だ」と言っておられました。我が意を得たり！ という感じを受けました。

お話を聞いて思い出したのは木内信胤先生です。木内先生は私が師匠と呼ばせて戴いている唯一の方です。以前、中斎塾フォーラムの前身である悟道会という勉強会で、木内信胤先生をお招きし講演をして戴きました。その時、私が木内先生に「お話をお聞きする会員は、先生のことを事前に調べて承知しております」と申し上げました。すると先生は、「では聞くが、私がいつどこで生まれてどういうことをしたか、皆さんご承知かね」と仰るわけです。そんな事は調べていませんから、ちょっと冷や汗が出たことを覚えています。

塚越参事が言われたように、質問をした時、その答えを聞いて鳥肌が立つ、背筋がゾクッとするような経験が私にもあります。それは相手が本物の人物であるとか、大変な話を聞いた時です。話の内容で、背筋がピシッと伸びることがあります。

人さまにお話をするというのは、大変難しいのです。真剣に話をすると眉毛が白くなると聞いたことがあります。異常な体験をして黒髪が一晩で真っ白になった、という話と同じです。安岡正篤先生はその理由を色々な書物や文献にあたって調べられたそうです。けれども答えは見つからなかった。専門家にも聞いて回り、最終的に分かった事は、真剣に話をすると五臓六腑、特に心臓を痛める。心臓を痛めると、眉毛に限らず髪の毛も白くなるという事だったそうです。心魂込めて話をした後は、立ち上がれない程の疲労感を覚え、結果として眉毛が白くなる。これは、生物学的にも医学でも証明されたという話があります。

人さまにお話をさせて戴く時は、事前に沢山準備をするわけです。私の場合、話をするのはそのうち３割ぐらいで、残り７割は話が出来ません。ですから、誰か質問をしてくれたら話をするのだけれどなあ･･･という心持ちでお話をしています。

そういう事を全部ひっくるめて、塚越参事の言われた「真剣勝負」という言葉に、我が意を得たりと申し上げました。

## 恒例の質問

本日は70分の講話時間ということですので、恒例の質問を先ず致します。今年に入って半年ぐらい経ちました。半年を振り返ってお考え下さい。

○　良い日がずっと続いている方

いつも申し上げておりますが、主観でお答え下さい。学問的な事を申します。主観を突き詰めると客観になり、客観を突き詰めると主観になる。氣持ちを楽にしてお考え下さい。

○　嘘は比較的つかなかったし、嘘をつかれることも少なかった方

○　有難うと言い、有難うと言われることが多かった方

○　身体の手入れをよくやっている方

皆さん手が挙がりました。お見事ですね。

○　自分磨きをよくやっている方

手の挙がらない方もおられるので、少し説明致します。

「切磋琢磨」という言葉がありますが、最近少し氣になることが出てきたので、ここひと月ぐらい考えて調べ直しをしました。しかし、やはりピンとこないので、猪瀬前理事長にお会いして宝石の出来る工程を再度確認しました。そうしましたら、切磋琢磨が飲み込めました。

「切」という字は、宝石の原石を刃物で切り落として切断をする。切断することによって、大きな鉱石の中から宝石の原石部分だけを取り出すことが出来る。起業する人に当てはめれば、何かやりたいと思って今いる組織を飛び出した段階です。

「磋」は、切り出した原石を一生懸命鑢（やすり）で磨く。人間で言えば、24時間必死になって働き続ける時期です。今の日本は「働き方改革」と称して、人間が必死になって物事に取り組む事を止めているように感じます。残業をしてはいけませんという考え方は、西洋風の考え方、キリスト教的考え方ですから、東洋にはそぐわない。今、日本がどんどん進めていることは、西洋の真似ばかりしている。ですから日本は衰退していると思っています。

「琢」は、私が昔お聞きしていたものは、砥石で研ぐ。きめ細かく研ぎ続けて、光沢が出てくるぐらいに磨いていくという説明でした。人間で言えば、必死になって働き続けて、大した人物だと認められるようになる。会社を創った人であれば、色々な団体に入って更に磨かれ揉まれて、よくやっているなという評価が社会から貰えるようになる。

「磨」は、磨いて宝石らしくなったものを更に金剛石（ダイヤモンド）で磨き上げて、素晴らしい超一流の宝石に仕上げていく工程です。名前を聞いてどんどん仕事が入って来るようになります。

そこで、「琢」という文字に戻ります。「啐啄同機」という言葉があります。卵の中で雛が孵ろうとする時、内側から殻を突く（啐）。すると、親が外から同じ場所を突いて（啄）、そのタイミングで合って卵の殻が割れて雛が誕生するという説明です。

そうしますと、「琢」は叩くという意味ですから、砥石で研ぐというのは意味が違う氣がします。調べてみると、学者の中でもやはり二分割の説明で大別されていました。そこで猪瀬前理事長に確認しました。そうしましたら、いくら綺麗に磨いていっても、どうにもならない出っ張りがある。それを鑿（のみ）でポンと打って落として、その上を砥石で研ぐという返事でした。「啐啄同機」も「切磋琢磨」も意味が通じました。

このように、自分が氣になったものを徹底的に調べ抜く。そうすると自分磨きになります。疑問に思った事は、そのままにしておかない。自分の頭で考えて、自分の目と手、体を動かして調べ抜く。その結果、納得がいけば自分磨き進んだと思って戴いて宜しいでしょう。

○　昨晩眠る直前、明日以降を過去形で考えた方

今日、この後のランチミーティングは春川会員が司会をされるそうですね。春川さんは昨晩寝る時に、明日のことが気になりましたか？

（春川会員）勿論、考えました。

ランチミーティングの司会を、どうしようか、こうしようか･･･と色々考えるでしょうが、最後に“よく出来るといいな”ではいけません。　“よく出来た。皆が褒めてくれた、拍手してくれた。良かった。”そう思って寝るのが、明日以降のことを過去形で考えることの実践です。

（春川会員）拍手がありました。皆を笑わせました。

**論語解説**

では論語に参りましょう。素読を致しますので、後についてお読み下さい。

・・・素読・・・・

日本人は学問的に見て大変特殊な能力を持った民族であると思います。中国から日本に中国語（漢文）が伝わってきた時は、「天 将に夫子を以て木鐸と為さんとすと」という読み方をしないわけです。最初は、「天（てん）・将（しょう）・夫子（ふうし）」とそのまま日本語読みしたのでしょう。これを何とか意味が分かる言葉に直せないかと考えて、「天」は「てん」でよかろう、「将」は何と読もうか、「夫子」は先生という意味だから「ふうし」でよい・・・という具合に色々考え合わせていった。「天 将に夫子を以て木鐸と為さんとすと」と読むまでには、相当時間がかかったはずです。

尚且つ、「天 将に夫子を以て木鐸と為さんとすと」と読むと、日本人は何となく意味が通じますね。つまり、何となく日本語に翻訳をしてしまったわけです。

日本人は中国の文字を見て、日本語流に読み替えた。その結果、意味が通じてきた。それに更に磨きをかけたのです。先ほどの切磋琢磨のように、磨いて、磨いて、磨き抜いて、読んだら意味が通じるようになったわけです。日本語は特殊な言語です。外国の文字をそのまま読んで、意味が通じる言葉に訳したというのは、他の国では聞いたことがありません。ですから、素読で自然と意味が分かるということは素晴らしいことだと思って下さい。

では、解説を致します。今回のテーマは「天」です。論語の中で天に関しては色々ありますが、その中から六つ抽出しました。

① 天(てん) 将(まさ)に夫子(ふうし)を以(もっ)て木鐸(ぼくたく)と為(な)さんとすと。

（八佾第三・24）

ここは「木鐸」がポイントです。木鐸とは、木の鈴です。新聞などで、「我々は社会の木鐸を任ずる」といった表現を見ることがあります。活字を使って世の中に知らせるべきを知らせるという意味です。元々の意味は、政府が国民に何かを知らせる時、軍事用の場合は銅や鉄を使い、かなり大きい音を立て、これから戦だぞ！ と知らせる。文事的なものは、木の鈴を鳴らしていました。

ここに挙げた論語は、天が孔子を木鐸としたという内容です。全文はお調べ下さい。出来れば事前に解説本などを読んで来て戴くとよろしいでしょう。

孔子が衛の国の儀という町へ行った時、国境を守る役人が、孔子が通るのを呼び止めて、「私は高名な方が通る際は必ず呼び止めてお話を伺います。是非、孔先生のお話を伺いたいものだ」と面会を求めたので、孔子がそれに応じました。面会が終わって、役人がお弟子さん達に言った言葉です。

「今、あなた方は放浪の旅をされているが、心配する事はない。天が孔子を遣わして木鐸としたのだ。（天が孔子という木鐸を遣わして、道理が亡くなった今の世の中に警鐘を鳴らしているのだ）」

② 夫子(ふうし) 之(これ)に矢(ちか)いて曰(いわ)く、予(よ)が否(ひ)なる所(ところ)あらば、天(てん) 之(これ)を厭(たた)ん。天(てん) 之(これ)を厭(たた)んと。

（雍也第六・26）

「矢」という字を日本人は「ちか（う）」などと読みませんね。どう読めばよいか、当時の学者が色々な言葉を当てはめてみて、「ちかう」が良いだろうと大勢が納得したから

だと思います。

これも衛の国の話です。君主である霊公の奥さんが南子、淫乱で有名な女性です。その南子が孔子に会いたいと言った。孔子は当然断るだろうと弟子の子路は思っていたけれども、孔子は会いに行った。それが噂になっているのを聞いて、孔子に詰問したのでしょう。孔子がタジタジとなって答えた科白です。

「お前はそう言うけれども、私がもしもお前が思うようなことをしているのであれば、天罰が私に下されたはずだ。」

・・・天は私を罰してはいない。お前もそれは認めるだろう･･･というような会話で収まったと捉えて下さい。

天が良くない人物だと判断したなら、天罰を下すだろう・・・と、孔子は天罰というものがあると信じています。反対に、天が望むことに協力している人間が危難に陥った時は、必ず天が助けて下さると信じているわけです。孔子が天について全面的な信頼を持っていることが分かります。

天は人類に対して良いと思えば応援をするし、良くないと思えばノアの方舟のような災害をもたらして、多くの命を絶つ。当時は、そのように天を捉えていたとお考え下さい。

**③　子曰く、天 徳を予に 生 ぜり。桓魋 其れ予を如何にせん。**

**（述而第七・22）**

桓魋は宋の国の君主景公の家来で、孔子の弟子である司馬牛の兄です。したがって孔子の情報は弟を通じて伝わっていると考えられます。その桓魋が孔子を殺そうとしたわけです。恐れる弟子たちに孔子が言った科白です。

「私は生まれながらに天から徳を与えられた人間なのだから、桓魋ごときが私をどうにかすることなど出来るものか。」

**④　五十にして天命を知る**

**（為政第二・4）**

これは孔子の一生を語ったと言われる有名な章句、「吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして 天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず。」の五十代です。

孔子は五十代で魯の国の大臣（今で言えば総理大臣代行のような、国の実権を握る職）

に就きました。実権を握っていた三桓を追い出して魯の国の改革をしようと進めますが、反逆にあって失敗し、放浪の旅に出る事になりました。自分の実力を全部出し切ろうと思ったところが、途中で挫折をさせられた。天はなぜ私を挫折させたのか･･･、これも私に与えられた天の采配だと悟って、「五十にして天命を知る」と言ったのでしょう。

人間には挫折が必要ですが、挫折するには一度登らなければなりません。孔子は五十代で国の実権を握るという、一氣に上って行った満足感と高揚感を実感し、そこから真っ逆さまに落ちるという挫折を味わったわけです。

ちなみに渋澤栄一は、七十代になって初めて「不惑」が分かり、そして「天命も知った」と語っています。

渋澤栄一は大隈重信から「明治政府の官になって、八百万の神々の一人となれ」と口説かれ、20 代から 30 代にかけて、今で言えば大蔵省の実権を握るようなポストで明治政府に仕えたという経緯があります。渋澤栄一は任官する前から、民間の力で日本を一流の国に仕立て上げる、政治家ではなく民間人として民間の力をつける事に一生涯を捧げるという志を持っていました。大久保利通と喧嘩をして官界を去り、その志を実行していったわけです。後に栄一は、「東京市長になれとか大蔵大臣になってくれと言われたが、私の仕事は官界ではないと皆断った。それ故に私は、一生涯の使命として決めたものを全うすることが出来た。この事が、天命を知ったと言えるのではなかろうか」と言っています。

**⑤　孔子曰く、君子に三畏有り。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして畏れず。大人に狎れ、聖人の言を侮る。**

**（季氏第十六・8）**

今、私は「子曰く（し　いわく）」と読みました。昔は「し　のたまわく」と読んでいたと前に申しました。先日、「しの　たまわく」という読み方を見つけました。孔大先生の素晴らしい言を賜るという解釈で、そう読んでおられる先生がいました。昔は、「し　のたまわく」という読み方と、「しの　たまわく」と読むのが拮抗していたようです。そういう印象を受けました。

孔子が言われるには、君子（素晴らしい人物）は三つの畏れを持っている。天命を畏れ、大人（徳と位を備え、天から与えられた使命を全うした人物）を畏れ、聖人（天命を伝えてくれる人物）を畏れる。

・・・畏れとは人間に対して畏れるのではなく、天に対して畏れるのです。敬虔に近い

とお考え下さい。ここでは大人と聖人は並んでいますが、大人が上で聖人が下と捉えています。

小人（器の小さい人物）は、天の存在を知らない。したがって天命も知らないから、天を畏れもしない。大人に対して図々しく振舞うし、聖人の言葉も侮るものだ。

貝塚先生の解説がとても良いことを言っておられると感じましたのでご紹介します。

> 中国のかつての支配者は、天に対して敬虔であった。西洋の支配者は、神に対して敬虔であった。日本の現代の支配者は、自分より強い権力者に対しては恐れるが、敬虔の感情を持たない。**私はこういう権力者の感情と行動に対して哀れみを感じる。**

最後の部分はとても面白いと思いました。

貝塚先生はじめ、色々な先生が論語の解説をしておられます。時々こういった先生方の解説もご紹介したいと思っています。そうすると、この先生はこういうタイプの先生なのか、こういう評価をされる先生なのか･･･等々が分かって、皆さんが解説をしている本を手にとるのに良かろうと思います。

**⑥　子曰く、天を怨みず、人を尤めず。下学して 上 達す。我を知る者は其れ天かと。**
**（憲問第十四・37）**

孔子が言われるには、（天は私に様々な挫折を与えたりして、逆境に陥ることもあった。これは天の考えたことだから）私は天を恨むようなことは一切しないし、人も咎めない。人間社会に生まれて、一歩一歩順序通り必死に学んで、最後は天の意思まで理解できるようになった。したがって、私のことを理解してくれる者は、もう天しかいないだろう。

ここは、孔子が諦めて愚痴をこぼしたのです。論語の中には、孔子が愚痴をこぼしている場面が結構あります。

**令和５年を考える**

では、テーマに参ります。

**・繁栄か没落、岐路の年**

何回も申し上げていますが、もう日本は没落に入っています。転げ落ちています。なぜならば明治維新以降、日本の国は精神的には転げ落ちています。日本がアメリカに負けて、ＧＨＱが日本に入って来た。そのあたりから、精神的な坂道の転げ落ち方は凄まじかったと思っています。

たまたま世界第２位だと褒めそやされるような経済力がついたけれども、その代わりに何かを捨てることになった。「得るは捨つるにあり」と申します。何かを手に入れるということは、今自分が持っている何かを捨てるということです。日本は経済力を手に入れた反面、心を捨てたのだと私は思っています。経済力が上がった代わりに日本人の精神的なものは凄まじく没落し、見た所そろそろ海の底に着きますね。海の底に着けば、反転して浮上します。

そういう状況下で、グローバリズムはもう終わりましたから、これから世界各国は地域地域で文化・文明が発達することだろうと思います。例えば中国は中国圏、アメリカはアメリカ圏、ヨーロッパはヨーロッパ圏を作るでしょう。アジアはアジア圏、アフリカはアフリカ圏・・・それがさらに細分化されていくだろうと思います。文化・文明はそれぞれの圏で大きくまとまってくるかもしれませんが、日本は日本独自の日本圏を構成することと思います。そういう方向に向かって日本はどんどん進んでいく。それが、もうすぐ始まるだろうと考えています。

したがって、今落ちることは良いことです。再生が始まりますから、日本が没落することは良いことだと思っています。

**・コロナは死亡しないことが肝心**

コロナの死亡者数に関して、新たに政府が言い出しているのは、ＷＨＯに従った超過死亡数です。超過死亡数とは、過去のデータから統計学的に推計される死亡者数と比較して、死亡者数がどれだけ上回ったかを調べるわけです。日本では大体１ヶ月ぐらい経つとコロナで死亡した人数が発表されるようになってきました。私が前から言っていた人口動態統計調査は、日本では５ヶ月後発表になります。いずれにしてもコロナの死亡者数は今までと違って相当遅れるけれども、発表は続くでしょう。

**・今年は騙されないように**

今は嘘をつくのが当たり前の世の中になりました。メディアだけが嘘をつくのではありません。メディアに乗せられると、我々も知らない間に嘘をつきます。生成ＡＩで作った水害のデマ画像が、ツイッターで拡散されたことがありました。見た人間が信じたなら、結果としてその人は嘘をついたことになる。自分が知らずして嘘をつくかもしれません。

したがって騙されないようにと申し上げたのは、自分が騙されたら自動的に嘘をつくわけですから、そういう事を承知の上で、世の中と対峙しなければいけないと思います。

お時間が参りました。本日の講話はこれで終了とさせて戴きます。